
昔々の聖と魔の物語

まあみん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

昔々の聖と魔の物語

【Zコード】

N1082A

【作者名】

まあみん

【あらすじ】

大昔に起つた聖なる者と悪しき者たちの戦争の様子を描いた作品です。

第0話・聖魔戦争

昔々、まだ人間が天界と繋がりのあつたころのお話です。そのころは、聖なる者がいれば悪しき者もいました。もちろん、悪しき者は、聖なる者を忌み嫌っていましたし、聖なる者もそうでした。

しかし、聖と悪には決定的な力の差はなく、この関係はいつまでも続くものだと思われてきました。ところが、悪しき者たちは突如として、聖なる者達に戦争を仕掛けできました。不意を付かれた聖なる者たちは、太刀打ちできずに、敗れ去つて行きました。そして、世界は悪しき者たちによつて、征服されたのでした。

第0話・聖魔戦争（後書き）

これから続く物語を昔話風で書いてみました。
どうなんでしょうかね？
これからがんばって書いていきたいと思います。

第1話・天命を受けた男

聖魔戦争が、始まり、半年が過ぎようとしていたころ、一人の男が天命を受け、地上に降り立つた。その男の名は「ギルガ・サンドロイア」と言つ。

この男は、唯一聖魔戦争を終わらせられる男であり、彼の中には、善悪と言つものが存在しない。どうこうことかどこうと、彼は善の聖なる者側につくこともできるし、悪の悪しき者側にもつくことができるのだ。

つまり、彼が選んだ勢力が、この地上を支配することになるのだ。
この男は全能の存在によつて生み出された。人はそれを神と呼ぶ、聖なる者は聖王と呼び、悪しき者は魔王と呼ぶ。

全能の存在は、どんな生き物にでも、平等に生を与え、平等に死を与える。しかし、このまま聖魔戦争が続けば、地上は荒廃し、生命は絶滅してしまう恐れがある、全能の存在はそれを良しとせず、ギルガを生み出した。彼を地上に放ち、彼の判断に任せ、地上を救おうとしたのだ。彼が選んだ勢力には、光と希望がもたらされ、聖魔戦争での勝利が約束される、しかし、全能の存在は、一つのミスを犯してしまつた。彼にはどちらの勢力も選ばないと言つ選択肢もあつたのだ・・・。

ここは、聖の国と、魔の国の国境に近い場所、この場所で、ギルガは気がついた。

彼には、言葉以外に何の知識もなかつた。全能の存在が、片方の勢力に固執しないように、知識を与えたかったのだ。彼は、ふらふらと彷徨いながら、悪しき者の國の方へと歩いて行つた。腰には聖剣「ローデインソード」を携えて。

第1話・天命を受けた男（後書き）

はい、第一話無事終了です。これから、書いていくわけですが、聖と悪またどちらにもつかずに、という選択肢があるわけですが、まだ決めてません。読んでくださっている方々、最後まで楽しみに。

第2話：一人の運命

ギルガが、魔の国に向かつて歩き始めたころ、一人の女性が目を覚ました。彼女の名は「エイニー・グルブス」といい、彼女は、地の王と呼ばれる者によつて生み出された、地の王は全能の存在を嫌つており、いつか一泡吹かせてやるうとたくらんでいたのである。

彼は、全能の存在が、ギルガを生み、地上に送り込んだ事を知り、それを邪魔してやろうと考へエイニーを生み出したのだ。地の王は、エイニーに一つの使命を与えた。その使命とは『ギルガ及び、ギルガの選んだ勢力を滅ぼせ。』というものだつた。地の王は彼女に知恵を与えた。自分が与えることのできる最大限に彼女に知恵を授けた。しかし、それが地の王のミスだつたのだ。地の王のミスとは彼女に知識を与えすぎたことだ、彼女は目を覚ましてすぐに理解してしまつた。全能の存在は正しいことをしているが、地の王のしていることは、自分勝手なことであり、わがままなで、利己的なことなのだと・・・。そして彼女は決めた。彼、ギルガを見つけたらできる限り協力しようと、彼女が与えられた知識を最大限利用し、聖魔戦争を終わらせよう。そして彼女もまた歩き出した。聖の国の方へと、背には魔槍「デビルボーンランス」を携えて・・・。ギルガが魔の国の方へ歩き出して数日がたつた頃、彼は魔の国の城へ辿りついた。

「・・・・・・ここはどこなんだ？あれはなんだ？」

彼の目の前には大きな城が建つていた。城に入るための門の脇に一つの張り紙がしてあつた。その紙にはこう書かれていた。

『魔の国に住んでいる勇敢な者たちよ！今こそ立ち上がり、聖の国を叩き潰そうではないか！』

「魔の国・・・聖の国・・・・・・・・？ぐあ！なんだ？頭が・・・割れるようだ・・・。」

彼の頭の中に短い文章が浮かび上がつた。

『聖魔戦争を終わらせろ。聖魔戦争を終わらせろ。』

「聖・・・魔・・・戦争だと？ なんだそれは・・・そんなもの俺には関係ない！」

彼はそう叫ぶと、魔の国の城くデビルズキャッスルくの中へ入つて
いった・・・。

第2話・一人の運命（後書き）

はい、第3話終了いたしました。地の王の策略がさつさと失敗しましたねえ～。自分が書く神やら王やらってのは自分の知識などを鼻にかけているイメージがありますから、よく失敗するんですよ。
それでは、第4話をお楽しみに。

彼、ギルガがデビルズキャッスルに入つていったころ、エイニーもまた城に着いていた。しかし、彼女の着いた城は聖の国の城だが・・・。聖の国の城は、見るものを圧倒させるような建造物だつた、城の中は小さな村が2・3入りそうなほど広いし、頭上を見上げると、天まで届くのではないかと思われるほど高かつた。エイニーが聖の国の城くセイントキャッスルくに見とれていると、突然、城壁の上にいた兵士達に矢を向けられた、「な・・・なんなのよ！私何もしてないでしょ？！」

エイニーが訳もわからないまま呆然と立ち尽くしていると、一人の男が出て来て彼女にこう尋ねた。

「この国に何のようだ！悪魔め！」

「はあ？悪魔？何で私が悪魔扱いされるのよー納得いかないわ！」

エイニーが叫ぶと男は毅然とこう言い放つた。

「その背に背負つているものはなんだ？聞かなくてもわかるがな！その禍々しい気を放つていいところを見れば誰にでもわかる！魔の武器だろうが！魔の武器を持つてているということは悪魔だろう！よし、捕らえる。」男がそう言つと城門から兵士達が出てきた。エイニーはここで抵抗することは得策ではないと考えられるがままに連れられていった。そして、城の中の美しい景観を見る事もなく、地下牢へと放り込まれた。

「ははは、悪魔め！少しばかり戦争に優勢だと思つて調子に乗りやがつて！貴様はすぐに処刑されるだろ？。それまでこの地下牢で、怯えているがいい！はははははは！」

この言葉を聞いたエイニーは、「冗談じゃないわ！聖魔戦争を終わらせようつて女がこんなところで殺されてたまるもんですか！見てなさいよ～こんな牢屋すぐに出でつてやるから！」

そう言つてズボンの中に隠してあつた短剣を取り出し、鍵を開けよ

うとした。そして数分後、「カチャツ」という音とともに、エイ一一が牢屋から出てきた。「ふふふ、こんなしょぼい牢屋なんて簡単に抜け出せるんだから。私をあまり甘く見ないでよね。」そう言って、自分のしたことに酔いしれているとほかの牢屋から一人の男がじやべりかけてきた。

「おい、あんたが誰か知らないが、俺も出してくれないか?」この男は、『ダグラス・マージェ』といい数ヶ月ほど前、王に逆らい牢に入れられたのだった。

「なんで私があんたなんか助けなきやいけないのよ。そんなに出たいんなら自分の力で出れば?私は忙しいのよね。」と彼の言ったことを無視して出て行こうとすると、ダグラスが

「出してくれないんなら、大声を出すぞ。俺が大声を出せばすぐに兵士がやってくるだろうな。それでもいいのか?」と脅すと、エイ一一は「…………ちつ、しょうがないわね、出してあげるけど私について来なさい。それが条件よ。」

これ聞いたダグラスは、「ふつ、気の強い女だな、よしいいだろうあんたに着いて行つてやろううじやないか。」これを聞くと田にもどまらぬ速さで牢屋の鍵を開けると一つ付け加えた。

「あなたの名前ってなんなわけ?」すると、「お前は人の名前を聞くときに自分の名前を先に言わないのか?ま、いいだらう、俺の名前はダグラスだ。」

「そう、ダグラスね覚えやすくていいわ。私はエイ一一よ、よろしくね。」

そう言つて右手をダグラスに差し出した、それに合わせてダグラスも右手を出して二人で握手を交わした。後にこの二人が、第三勢力として旗揚げするのだが、それはまた後の話だ……。

第3話・地下牢での出来事（後編）

はい、第3話終了いたしました。前話にも第3話と書いてあります
が、お気になさらず。さて、エイニーとダグラスが出
会いました。彼女達がこの先どうなるのか、セイントキャッスルか
ら無事脱出できるのか、今後の期待です。

第4話・脱獄（上）

「ハイニーと、ダグラスは長留は無用とこいつ」とで、やつせと逃げ出すことにした。一人が出口に向かって走っていると、城の中が騒がしくなってきた。

「ちひ、もう気付かれたようだぞ。急がなければなー」とダグラスが言うと、ハイニーも賛成するように、

「そうね。」

と言つたとき、後ろから兵士たちの足音が聞こえだした。

「～王の間～

「先ほど捕らえた悪魔が、謀反者のダグラス・マージュとともに脱獄いたしました！」

すると王は怒りをあらわにして兵士にいい放つた。

「脱獄だと？ 貴様らは何をしていたんだ！ 悪魔から田を離したらいかんとあれほど言つただろうが……早く捕らえろー！」

「ハツ！」 兵士たちは一斉に王の間から出でていった。

「あの能無し共め、こんなことだから魔の国に押されているのだ……」

「王はこいつ呼ばした。」

すると右にいた親衛隊の「カイン・トンパー」が王にこいつ言つた。

「王！ われわれは能無しではありませぬ！ あんな下級の兵と一緒にされでは困りまする！」

こちらも怒りをあらわにしていた。

「ん？ ああ、すまなんだ。君ら親衛隊には関係ない言葉じゃ。気にするな。」

するとカインは閃いたよう、「元気

「王、我々が逃げた悪魔とやらを捕まえてみせましょー！ 悪魔の相手は普通の兵ではちとつらいでしようから。」

王はこの発言にとても喜び、

「おお！ 行つてくれるか？ われもやうしたまうがよこと思つていた

ところなんじや。貴殿が行つてくれるなら安心じや。必ず、悪魔を捕らえてまいれ。」

「御意！」

カインは一礼するとわざと戦闘の準備に入つた。

「城の門」

ダグラスとエイニーは城の門で立ち往生していた。

「クソッ！」ここまで来て門が閉まつては・・・、万事休すか・・・。」

ダグラスが床に手を着き悔しがつてている。

「立ちなさい。こんな門私が破つてやるわ！」

そう言ひや否や、エイニーが呪文を唱えだした。

「地に棲む我がしもべたちよ、我の声を辿り姿を現せ。我はここに在り・・・。」

呪文が終わると、城がいきなり揺れだした。

「な、何をしたんだ？」ダグラスが驚いた目をしながら聞くと。

「ただの魔物を召喚しただけよ。今からここに来るわ、ああ、安心して全て私のしもべたちだから。」

エイニーは、ダグラスが魔物と聞いて不安そうな顔をしたので、あわてて付け加えた。

すると、一人が立つてゐる周りの地面が盛り上がり。魔物の頭が見え始めた。するとエイニーが魔物に指示を出した。

「門を壊しなさい。大至急にね。」

魔物たちは指示通り門を破壊し始めた。みるみるうちに壊れしていく門、近づいてくる兵たち・・・。そして親衛隊カイン。彼の実力はどんなものなのだろうか・・・。

第4話・脱獄（上）（後書き）

はい、約一ヶ月ぶりの投稿です。これからもガンバッテ
書いていきますので、よろしくお願いします。

第5話・脱獄（下）

エイニーが召喚した魔物が門を壊していると、背後から大人数の兵士が一人を取り囲んだ。

「ちつ！追いつかれたぞ！どうするんだ？」ダグラスが、エイニーに尋ねた、が、エイニーは冷静に。

「どうにもならないわね、魔物にでも襲わせる？」

と、冗談半分に返答した。

すると、兵士たちの中から、一人の騎士が声を上げた。

「私が・・・私が相手をする！」

兵士たちを押し分けて二人の前に姿を現したのは、親衛隊のカインだつた。

「貴様が悪魔か・・・私にはそうは見えんが、我が主の命で貴様を投獄する。」

カインはそう言い、腰から自分の剣、いや、剣というには大きすぎる程の大剣を抜いた。

「我が聖剣ホーリーソードで貴様を斬る！さあ、武器を構えよ！」

「はあ、しようがないわねえ。ま、時間稼ぎには最適かしら。」

余裕の表情でこう言つと、背から魔槍デビルボーンランスを抜いた。

「おい！やつは王の側近の親衛隊だぞ！大丈夫なのか？」

ダグラスが心配そうに、尋ねると、

「だから、時間稼ぎだつて言つてるでしょ？本気でやるわけないじやない。ま、見てなさいって。」

と、言うや否や、槍をまっすぐカインに向かつて突いた。

「ほう、なかなかの腕だな、投獄するには惜しい人物だ。だが、所詮悪魔！聖なる騎士には勝てん！」

カインは、剣で、槍を払い飛ばし、エイニーの腹に向かつて、剣を横に払つた。

「手こたえあり！」

しかし、エイニーはカインの後ろに回り込み、槍の柄で後頭部を殴り、気絶させた。

カインは、消え行く意識のなかで、一つのことだけを考えていた。

「なぜだ、確かに手ごたえはあったのに・・・。悪魔・・・悔つた。

「 周りにいた兵士たちは、エイニーの強さに驚き、恐怖し、一目散に去つていった。

「さて、門も壊せたことだし、さっさとずらかりましょうか。」

「ああ、そうだな。」

二人は、城を脱出し、闇の中へ消えていった。

（王の間）

「何！ 悪魔を取り逃がしただと？ カインは何をやつとったんじゃー！」
王はまたもや怒りをあらわにしていた。

「カイン様は、悪魔と戦いましたが、あの・・・その・・・。
けました。」

「なんじゃ？ 聞こえんぞ！ もつとはつかり報告しろー。」

すると、兵士は意を決したようで、

「カイン様は、悪魔に負けました。」とほとんど怒鳴るよつた声で報告した。

この報告を聞き、王は、

「何じやと？ カインが悪魔に負けたと申すかーべべべ、あやつめ、
何をしておつたんじや！ カインをすぐここに呼べー！」

兵士は、一目散に王の間を出て行つた。

数分後、カインは王の前でひざまづいていた。

「カインよ、貴殿は悪魔に負けたそうじやな。貴殿の強には絶対の
信頼をしておつたのに、わしを裏切りあつてー貴殿など親衛隊でも
何でもないわ！ 出て行け！ この国から出て行け！」

カインは何も言い返さず、ただ一言

「御意」

と言つて王の間を出て行つた。

（城の外）

カインは一人立ちぬくし、遠くを見るような目で考えていた。

「あの悪魔の強さは尋常じやなかつた、あの悪魔なら戦争を終わらせることができるかもしだれない。いや、しかしあやつは悪魔だ。悪魔が私の言葉に耳を貸すとは思えんが。

だが、あいつは何かが違つた。私が戦場で戦つてきた悪魔とは何かが・・・。」

カインは心を決め、ある方向へ歩いて行つた。

それは、エイニーとダグラスが向かつた方向だつた・・・。

第5話・脱獄（ア）（後書き）

これからも、ダンジョン書にてこままでー。

一応お前が出てくるキャラは重要なキャラです。これからこの彼らの活動にじっくり期待ください。

第6話・第三勢力

場所は変わり、ここは、ギルガが行き着いた魔の国の城くデビルキャッスルゝである。ギルガが城の中に入るとそこには兵士も誰も存在しなかつた。

「・・・誰もいない、城はあるのに住んでる奴がいないのか？」
大きい城だつたので、一通り見て回るのに三十分近くかかつた。
一通り見て回り、何も情報が手に入らなかつたので、出て行こうとしたとき、城の地下から大きな音がした。

「ん？ 何の音だ？」

音のした方へ行つてみると、そこには地下へ続く階段があり、まだそこは見てなかつた。

「地下か・・・氣づかなかつたな。行つてみるか。」

地下へ続く階段を下りていつた。最後の段を降り、あたりを見回してみるとそこは牢屋だつた。結構広い牢屋で、五メートル四方ぐらいの大きさだ。その牢屋が、左右にあり奥は五十メートルぐらいい広さだつた。奥のほうまで歩いていくと、通路が丸焦げになつている牢があつた。中をのぞいてみると、一人の少女がこちらを覗き返した。

「・・・お前は誰だ？」

すると、少女はギルガを穴が開くほど見つめてこう言つた。

「・・・・アリア。あなたは誰？」

「ギルガだ、ひとつ聞くが何でこの城には誰もいないんだ？」
少女は知らないと言つたように首を振つた。

「二週間ぐらい前から食事が運ばれてこなくなつた。だから多分そのぐらい前からいないんじゃないかしら。なぜかは知らないけど。」「そう・・・か。」

ギルガが何かを考えるようにしてゐると。

「何考へてゐるか知らないけど、助けて欲しいの。この牢、魔法じや

壊せないのよ。」

「魔法か、お前は魔法使いか。」

つぶやくようになり言つと、腰に携えている剣を抜いた。

「離れてろ・・・。」

ボソッと言つと剣を構え、一気に振り下ろした。すると、魔法ではビクともしなかつた牢に四角く穴が開いていた。

「す””い・・・。どんな力してるのあなた。」

剣を鞘に戻し、ギルガは立ち去ろうとした。

「じゃあな、あとは好きしな。」

「う言い城から出ようとした。

「ちょっと待つて。あなた何者？こんな芸当ができるなんて、ただの人間じゃないわよね。」

「何者か？それは俺が知りたいことさ、ビニで生まれ、なにをするか、俺は何も知らない。」

少女は、意を決してギルガに提案した。

「あのね、今、この世界では聖の国と魔の国の戦争、いわゆる聖魔戦争が起ころてるのは知ってるわよね？それで、世界は荒廃しようとしているの。そこで、それを防がなきやいけないと思つて戦つてる組織がある。あなた私たちと一緒に戦わない？とても強いし、あなたがいてくれると頼もしいわ。」

「組織？世界の荒廃を防ぐ？・・・要はどういうことをするんだ？」アリアの漠然とした説明ではイマイチよくわからなかつたギルガが尋ねた。

「う～ん、簡単に言つと戦争をやめさせるの。戦争さえ止まれば世界の荒廃は防げるわ。だけど、そんなに簡単なことじゃないの、魔の人間たちは戦争をやめる気はないし、聖の人間たちは魔と共に存するつもりはないらしいの。だから世界中のこの世界を救いたい人たちを集めて、第三勢力として戦い、世界を統治するのよ。まあ、まだメンバーはそんなにいないんだけどね。」

「戦争を終わらせる、か、・・・いいだろ？俺にも目的とこうも

のが欲しいからな。」

ギルガが選んだ道は第三勢力として戦争を終わらせる道だった。この世界は大きく変わらうとしている。ギルガはこれからどういった行動を取り、どう成長していくのだろうか。

（天界）

「ふふふ、あなたがお作りになつた人形は一番大変な道を選んだようですね。あなたは気づかなかつたでしきうが、選択肢は一つじゃないんですよ。無限にあるんですよ、ふふふふふ。」

とても美しい女性は笑いながら去つていつた。全能の存在を残して・

第6話・第三勢力（後書き）

はい、第6話終了です。ん、なんか難しいですね。
いつたい何話まで続くのでしょうか、30話以上になりそうな気が
するんですが・・・。
ま、これからもがんばりますよ~。

（天界）

「くそ、わしとしたことがこんな重大なミスにも気が付かなかつたとは・・・まあよい、要は聖魔戦争が終わり、世界の破滅を防げばいいんだからな。しかし、地の王があんな玩具を出してくるとはな。あれも失敗作だし、放つておいても問題なかろう・・・」

そう言い、部屋から出て行つた。

場所は変わって、地上。ギルガとアリアが「デビルキャッスル」から出ると、待ち構えていたように一匹の魔物に襲われた。

「・・・竜か、見る限りそんなに強い奴じやないだろう。お前片方頼んだぞ。」

そういうや否や、竜に切りかかっていった。

「え〜、ちょっと待つてよ。もあ、簡単に言つんだから。こつちは二週間もご飯食べてないのに。」

ぶつぶつ文句を言いながらも、詠唱を始めた。

「・・・・・ええ〜い！」

そう叫ぶと、アリアは空に向かつて手を上げた。すると、空中に大きな氷の塊が浮かんだ。

「竜なら多分氷が苦手でしょ、くらえ〜。」

叫びながら両手を振り下ろした。すると、竜に当たる前に氷が粉々に砕け散り、竜に氷の粒が次々と刺さり、地面に横たわった。しばらく、大きく息をついていた竜だが、そのうち息もしなくなつた。

「ふう、楽勝ね。」

後ろで、剣を鞘にしまう音が聞こえた。

「ずいぶんと手間取つたな。」

振り向くと、そこには首を刎ねられた竜の死骸が横たわっていた。

「うわ〜、ずいぶんとグロテスクな竜だね。」

アリアが青い顔をした。

「これが一番早いと思つたのでな。さあ、先を急げ、また竜が来るかもしれん。」

二人は、魔の国から南に向かつて旅立つていった。

場所は変わり、ここは聖の国から遙か北に位置する世界一大きい谷。通称「地獄の入り口」だ。エイニーとダグラスは、橋があつたであろう場所の前に立つていた。

「橋が落ちてるわね。ここ以外にこの谷を渡れる場所は無いの？」ダグラスは困ったように対岸を見つめ、こう言つた。

「・・・この橋しか向こう側に渡る術は無いんだ。南に行けば魔の国に入るが、聖の者にも魔の者にも見つかってしまうし・・・。どうすればいいんだ。」

二人がこのような会話をしていると、背後から石が転がるような音がした。

振り向くとそこにはカインがいた。

「何アンタ、ここまで追つてきたの？ 私に勝てないことはわかつたでしょ。命が惜しければ消えなさい。」

エイニーが、強い口調でそういうと、カインは、

「ふふふ、私が勝てないことはわかつている。しかし、消えようにも帰る場所が無いんでな。貴様らの目的はなんだ？ 聖の国を滅ぼすことか？ そうならば私は貴様らを殺さねばならん、たとえ勝てないとわかつていようと命に代えてでも、貴様らを殺すぞ。どうなんだ、悪魔！」

と、腰から剣を抜きながら言つた。

「悪魔って・・・、はつきり言つけど、私は悪魔じゃないわよ。確かに魔の武器を使つていてるけど悪魔じゃないわ、けれど聖の者でもない。ま、あえていうなら中間つてことかしらね。目的は、この地に降り立つた、全能の存在が作った人間を見つけ出すことよ。」

エイニーはカインが自分たちと戦つてくれると確信し、全てを教えた。

「・・・戦争を終わらせる、その言葉真実か？どうやってだ？第三勢力にでもなるつもりか？」

カインが聞くと、

「そうね、それはいい考えだわ。そうやって名前を売つていけば探している人間も見つかりやすくなるつてもんね。」

と答えた。

「で、お前はどうするんだ？カイン、俺たちについてくるのか？それともここで死ぬのか？二つに一つだ。」

ダグラスが短剣を抜きながら聞いた。

「お前なら俺の実力を知っているだろ？短剣さえあれば貴様の大剣であつても俺を殺すことはできんぞ。」

カインは、剣を鞘に戻し、二人を見つめてこう言った。

「・・・信用したわけではないが、戦争を終わらせるというなら手を貸そう。こんな悲惨な状況は早くどうにかしたいからな。で、探している人間というのは全能の存在に作られたといったが、そんなことがありえるのか？」

半信半疑の様子で、カインが聞いた。

「ええ、だつて私も地の王に造られたのよ、その人間を邪魔するためには。でもそんなことは何の意味も無いことだわ。せつかくどんな形であれ、生を受けたんだから、意味のあることがしたいじゃない。だから、その人間を探し出して協力するの、戦争を終わらせるためには。」

カインとダグラスはこの言葉に驚いたようだ。それはそうだろう、目の前に普通に生まれたのではない人間がいるのだ。

「どうか、お前の強さの理由がわかつたような気がするよ。俺が勝てないわけだ、地の王って言えば、神話でしか読んだことが無いが、戦闘能力なら全能の存在に勝るとも劣らないといわれているからな。ところで、これからどうするんだ？橋は落ちているし、南にもいけないんだろう？もつと北に行けばエルフの住む森があるが、奴らは人間を嫌っているし・・・。」

三人で考えているとダグラスが、

「北のエルフの森を抜けるしかないんじゃないか？谷も渡れない、南にも戻れないんだから。まだエルフの森を抜けるほうが楽だろう。

」

と、提案した。

「そうだな、エルフの中にも俺たちに強力してくれる者がいるかもしれんし。」

カインが賛成した。

「そうね、ここで止まっていても仕方ないし、進むだけね。」

三人は荷物を持って歩きだした。

北のエルフの森に向かって。

第7話：対角線上の一人（後書き）

遅くなりましたが、第7話完成です。一人は全然正反対の方向に進んでいます。これからどうするかが悩みどころですね。これからも末永くお楽しみください。

評価をもらえると飛んで喜びます。酷評、批判、なんでもいいので、感想などをください。

エイニー達が「地獄の入り口」から、エルフの森に旅立つて一週間が過ぎた。

「あ～、もう！まだエルフの森には着かないの？」
と、愚痴をもらしていると、

「もうそろそろ森が見え始めてもいいんだがな・・・。あ、見えたぞ。アレがエルフの森だ。」

と、カインが言った。その言葉を聞いて元気を取り戻したエイニーは、

「早く行きましょう！膳は急げよ！」
と言つて、早足で歩き出した。

「ふつ、現金な女だな。」

ダグラスが笑うと、カインもつられて笑つた。
この一週間で、この三人の仲は良くなつていた。
そういうするうちに、三人は森に着いた。

「さあ、入りましょう。」

エイニーが森に足を踏み入れようとすると、木の上から矢が飛んできた。

「・・・！危ないわねえ～。誰？」

間一髪でこの矢をよけると、背から槍を抜き構えた。

ダグラスとカインも腰から剣を抜いた。すると木の上から、「この森に何のようだ。ここは貴様らの来る場所ではない。早々に立ち去れ。」

という返事が返ってきた。するとエイニーが
「嫌よ。この森を抜けないと進めないんだから。」
と反論した。

「・・・・。どんなに言つても入ると申すか。」
エルフが再度問い合わせると、

「ええ、力ずくでもね。」

エイニーが答える。

木の上から、一人のエルフが降りてきた。そのエルフは三人に着いて来いとでも言うように、手招きすると森の奥へ消えていった。

「・・・信用するしかないな。」

三人は頷き、森へ入つていった。

どれだけ時間がたつただろう。さすがに三人とも疲れ果てていた。前を歩くエルフはなんでもないように歩いている。

「もあー、あのエルフどんな体力してるのよ。何時間も歩きっぱなしよ。」

エイニーが不満気に声を出す。

後の二人も同意見のようだ。

三人がなおも歩いていると、いきなり目の前に広場が現れた。

「止まれ。」

エルフはそうつぶやくと何か唱えだした。

「・・・森に隠れし我が里よ、今その姿を現し、我を招きいれよ。

呪文が終わると、周りに自然の里が現れた。

「外敵から身を守るために隠しておるのだ。着いて参れ。」

エルフは里で一番大きいと思われる屋敷に三人を連れて行つた。

「なんか嫌な感じね。このエルフたち。」

エイニーがそういうのも無理は無い。エルフたちは三人を見ると隠れたり、家中へ入つていつたりしてしまう。

「そんなに珍しいものなのかな?他種族というのは。」

カインが考えていると、屋敷に着いた。

その屋敷は、まるで大きな木を丸ごと家にしたような、すごく綺麗な建物だつた。

まるで、木が生きていて大きな口を開けている。そんなことを思わせるような、入り口をしていた。

「入つてくれ、話を聞きたい。」

エルフはそういうと家の中へ入っていった。

第8話・隠れ里（後書き）

とても久しぶりの投稿です。楽しみしててくれる方、いらっしゃるんでしょうか？いくださること前提でこのあとがき書きます。リアルに忙しくて小説の続きをかけませんでしたが、これからは一ヶ月に2話以上、投稿するつもりですので、お楽しみください。

第9話・奇怪な事件

エルフの屋敷に入つて、客間に通された。

大きな、ソファーに座るように言われ、三人は座つた。
「で、聞きたいことってなんなの？」

待ちきれないようにエイニーが切り出した。

「まあ、自己紹介ぐらいさせてくれないか？」

俺の名前はサイランだ。君らの名前は？」

エルフがやんわりとした言動で聞いた。

まずはエイニーが、

「エイニーよ。」

次にダグラスが、

「ダグラスだ。」

最後にカインが、

「カインと申す。」

三人が一通り自己紹介を終えるとサイランが、

「君たちに聞きたいこととはなぜこの森にやつてきたか、

そしてこの女は何者なのか、ということだ。エイニーといったか

君の背にある槍は魔の武器だらう？ 今まで魔の武器を携えてやつてきたものは

居なかつた。そしてカインだつたか、君の剣は聖剣だらう？ この

組み合わせは

変じやないか、だから聞きたかつたのだ。」

サイランがここまで一気に聞いた。確かにこの三人はおかしな組み合わせだらう。

一人は魔の武器を持つてゐるし、一人は逆に聖の武器を持つてゐる。今は戦争中だし、この組み合わせはありえないといつてもいいだろう。

この質問にエイニーはだるそうに答えた。

「まず一つ目、この森にやつてきた理由は魔の国に行きたいから、一つ目、私は魔の武器を使つていてるけど魔の国の者じゃないわ。力インと一緒に居るのだって利害関係が一致しているから。それ以上の理由は無いわね。まだ、完璧に信用できているわけでもないし。」

サイラーンはその答えを聞いて、一つ疑問に思ったことを聞いてみた。
「君らは地獄の入り口を渡らなかつたのか？」

この質問に力インが、

「橋が落ちてしまつていて、誰がなぜそんなことしたかはわからんが、あの橋があつてはなにか都合が悪かつたのだろうな。」

橋が落ちたと聞いてサイラーンは驚いた。

「何、また橋が落ちていたのか。最近直しても直しても橋が落とされるのだ。」

この話を聞いて三人は考え込んだ。

橋が何度も落ちるのには何か理由があるのではないか、エルフが知らないとすると、エルフが落としたのではない。カインも知らなかつたのだから聖の国の仕業でもない。だとすれば、魔の国の仕業となるが、なぜそんなことをしたのだろう。

三人が黙つているとサイラスが、

「君らには少しの間ここに滞在してもらつことになる。

橋が直るまでな、橋が直つたら早々にこの国から出て行つてもらうことになる。

『言つておくがこの森を抜けようとしても無駄だぞ、エルフにしか抜けることはできないように

魔法がかけてあるのでな。』

サイラスはそれだけ言うと部屋を出て行つてしまつた。

三人は、この家の召し使いだと思われるエルフに部屋を案内してもらつた。

部屋に着くと三人は否応も無く眠気に襲われた。

何も考えずに寝るのは後どれくらいできるのだろうか。

橋が何度も落ちるのはなぜか、それらの解決に彼らは携わることとなるのだが、

三人はそんなこともしらずに気持ちよさそうに寝ていた。

第9話・奇怪な事件（後書き）

一ヶ月に2話投稿できました。よかったです。
感想待つてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1082a/>

昔々の聖と魔の物語

2010年12月13日22時52分発行